「代替医療」「補完療法」と称される治療法の歴史的展開を記述し、まさに副題にいう水とハーブのシンボリズムを織り込んでいく。ここはまさに著者の独壇場である。特に第六章では薬学者でもある著者の自然薬物への博識が披瀝され、メッセゲの植物療法やハーネマンのホメオパシーなどの理解に大いに学ばされるものがあった。

「終章　〈癒し〉のプロブレマティーク」では生殖医療技術の現代的動向に触れながら、本書で取り上げた世界が指向する「魂への配慮」としての養生のあり方と自然性と霊性の再獲得を論じている。代替医療の現代的評価が著しい現代において、養生の意義とその展開の多様性を示した本書のあり方にわが意を得たと思うのは評者だけではあるまい。

（瀧澤　利行）

〔世界思想社、京都市左京区岩倉南桑原町五六、電話〇七五―七二一―六五〇六、平成十四年三月三十日、四六判、二九八頁、一九〇〇円〕

小高　健　編

『長與又郎日記　近代化を推進した医学者の記録』

本書は、近代日本の医療行政・衛生行政の基礎を築いた長與専齋の三男で、東京帝国大学総長をつとめた長與又郎の日記とその解説からなる著作である。編者の小高　健　氏は長與又郎も深く関与した伝染病研究所の後身である東京大学医科学研究所の教授をつとめた。すでに著者は『傳染病研究所』（学会出版センター刊）によってこの間の事情を著している。長與又郎についてはすでに戦前の昭和十九年に『長與又郎傳』（長與博士記念会）が刊行されているが、本書は長與自身の膨大な日記をもとに、編者による詳細な註と解説が章ごとに付されている。これをもってしても、本書が長與又郎について知るための第一級の原史料であると同時に研究書であることは言をまたない。

本書は上下二巻よりなり、上巻六六〇頁、下巻六六四頁の計千三百二十四頁の分量である。通読だけでも相当の時日を要すると思われた。しかし、評者は上下二巻をほぼ二日で読了した。もちろん、一日のほとんどを費やしてではあったが。これは評者の読書力を誇るのでは決してない。それほどに面白くまた感慨深く読めたのである。

同書の上巻は長與の出生、幼少時、東京帝国大学医科大学の修学時代、助手、講師、助教授、そして三十三歳の若さで病理学教室の教授となるまで、そして伝染病研究所の兼務時代、恙虫病の実地調査、伝染病研究所所長時代、医学部長時代、癌研究会会頭、帝大野球部長、国立公衆衛生院の設立など二十二の章よりなっている。主として長與の東京帝国大学総長就任以前のことを中心に書かれている。

下巻は昭和九年十二月に東京帝国大学総長に就任して以来、昭和十六年八月に逝去するまでの間を二十の章で構成し

ている。この間には美濃部達吉の天皇機関説問題（昭和十年）、二・二六事件（昭和十一年）、盧溝橋事件―日中戦争勃発（昭和十二年）、矢内原事件（昭和十二年）と大学の内外において騒然たる事件が続発し、戦争への足音が高鳴ってくる時期にあたっている。昭和十三年十一月に四年弱の任期のうち、長與は総長を辞任するが、その後わずか三年で逝去に至る。それは奇しくも日米開戦の四ヶ月前であった。

決して当時の平均寿命からすれば短くはなく、さりとて必ずしも長命とはいえない長與の生涯ではあったが、明治医学界における元勲ともいえる長與專齋を父にもち、しかも本人自身東京帝国大学医科大学を席次二番で卒業し病理学者としても業績を上げた医学者で、しかも短艇と野球を愛好した多面性をもつ長與の日記とその詳細な解説をわずかな紙幅で語ることは不可能である。やはりすべては読了してからの話であるとの観を強くもつ。しかしながら、評者の目下の関心と非常に重なる点で大いに感慨深く読んだ点があるので、そこを中心に若干の読後感を交えたい。

筆者の感慨を深くした点は長與の大学人としての身の処し方である。それは一言でいえば「大学の自治」の慣行をいかにして守るか、その基本となる学部教授会の自治とその質をどのように保つかにつき、長與が特段の努力を払っていることが日記のリアルな記述によって鮮明に描かれている。例えば「第十章　医学部人事と医学教育」では、長與が医学部教授会に助教授を出席させることに積極的であったことが描かれている。長與はいう。「自ら教授になった後は、他に同列の者が多くなることを好まぬ小さな腹を持っておるものが随分ある様だ。そしてこの組に属する教授は皆能力の比較的劣等な学術上の仕事をしない人に定っているのは可笑しいが、考えてみるとそうありそうな事だ。」と書いているのには現代とあまりの相似に驚いた。また、同じ章で小金井良精（解剖学教授）の停年にあたって「真面目な力のある教授を送るのは惜しいが、惜い位の人を送らなければ改革は出来ない。」と断言している様子は実にさわやかである。また、第二十章「配属将校問題」では医学部長時代に起きた軍事教練の配属将校一名増員問題における大学の自治の守り方はこと長與に限らず当時の東京帝国大学教授陣の自治のあり方を考える上で大いに参考になる。長與は大学の自治と内部からの耐えざる改革を指向していた点でリベラルな大学人であったが、闘争的ではなく、融和的でバランス感覚に富んだ常識人であった。この点は矢内原事件などで見せた長與の態度に一貫している。

さて、編者のこの日記の編集に臨む態度が並々ならぬものでなかったことは、本書中の解説部分の量を見れば分かる。その解説部分と註だけでも優に一冊の本が編めるほどに充実している。註の内容も単に事実の提示にとどまらず歴史的な詳細な配慮がそこここに行われている。関連調査も周到に行っている。それだけでも一読に値する。

本書は一人の医学者の記録を通した近代日本における大学

と学問の発展史として読むことができる。そのリアリティの価値は将来にわたって燦然たるものとして残るだろう。

（瀧澤　利行）

〔学会出版センター、東京都文京区本郷六―二―一〇、電話〇三―三八一四―二〇〇一、上巻平成十三年三月二〇日、四六判、六六〇頁、本体七〇〇〇円、下巻平成十四年六月五日、四六判、六六四頁、本体七〇〇〇円〕

石塚久郎、鈴木晃仁　編

『身体医文化論―感覚と欲望』

面白い論集が誕生した。医、身体から喚起される豊穣なイメージを、英文学、英国ルネサンス演劇、英国史、表象文化論といった、いわゆる文系育ちの若い頭脳が、枠を越え多彩な視点から自由自在に料理してのけていく。もちろん、医学史、科学史、比較神経解剖学と理系にも関わる分野を専攻する研究者たちも参加しているが、ごく少数にすぎない。

『身体医文化論』という新しい言葉を表題に掲げた、この論集の誕生の背景には、一九八〇年代以降の欧米における「医学史」に向けられる眼差しの変容と、英国に長期間留学し、英語・日本語どちらをも自由に駆使して活発に議論を交換しあい独自の論を構築していける一九六〇―七〇年代生まれの若い研究者たちの、集団としての華々しい登場がある。

彼らの集団としての活動の場である「身体文化研究会」は、慶応義塾大学の学事振興基金の助成を受け継続的な研究会活動を行ってきた。この論集は、この研究会において二〇〇〇年度に「感覚と欲望」をテーマに発表されたもののうち15本のペーパーと石塚、鈴木による比較的長文の序章から構成されている。

文字通り多様多彩な論考が並べられていて、この短い紙幅では到底すべてを網羅して論評を加えることは不可能である。せめて、表題を紹介しておきたい。

第I部、「十七・十八世紀―身体の神学と情念の劇場」には、次の四本の論文が収められている。小菅隼人「表れる内面―「ハムレット」に見る演劇の力」、那須敬「病としての異端―十七世紀内戦期イングランドにおける神学と医学」、鈴木晃仁「霊魂と身体の政治的メタファーの類型学―十七世紀の情念論を中心に」、石塚久郎「アプルガースの神経神学―霊的感覚と来世の身体」。

第II部「十九世紀―表象する医学・表象の中の医学」には、次の五本。横山千晶「見られる身体・診られる身体―解剖と女性の図像学」、中村哲子「乳癌を病むドゥラクール子爵夫人、そして女の欲望―マライア・エッジワースの『ベリンダ』（一八〇一年）をめぐって」、アルヴィ宮本なほ子「恐ろしき均衡―プロメテウスの創るロマン派的身体」、村山敏勝「メアリー・エリザベス・ブラッドン『医師の妻』―センセーションとプロフェッション」、上山隆大「感覚の治療と欲望の市場―